高知県立坂本龍馬記念館だより　2009（平成21）年4月　第69号

高知県立坂本龍馬記念館　The Sakamoto Ryoma Memorial Museum

飛陽

ひとう

海援隊旗（二曳きの旗）

http://www.ryoma-kinenkan.jp

時節到来 JISETUTOORAI

”変化の時“龍馬を発信

”変化“は今、地球規模である。戦火は消える気配もない。飢餓におびえ、地球環境は確実に悪くなっている。米国ではオバマ大統領が誕生した。日本も政治、経済、社会、いずれの分野も揺れに揺れる。平成の現代が幕末にオーバーラップする。坂本龍馬記念館は今年度、指定管理（公募）の5年の初年度がスタートだ。三年後（平成23年）には開館二十年の大きな節目。館にとって今年は「変化の年」なのである。企画展もイベントも「龍馬を発信！」をスローガンに心を一つにする。

●三人三様、同じ夢を信じて

21年度企画展の柱は「風になった龍馬」VOL1―時代の不思議―（10月10日～平成22年1月11日）。龍馬・万次郎・海舟・海と船。三人三様の人生が時代のほんの一瞬すれ違った時、新しい時代を思う”夢“が重なりパワーとなった。日本を創る力である。思いの原点は「自由」「平等」。三人の生き様を通して、現代へのヒントを探る三年連続企画である。日本財団からの援助も決まった。充実の企画展になる。

●土佐陶器の逸品が

能茶山色絵紋づくし砧徳利

4月から7月にかけては「近世土佐の焼き物」展である。品位、品格は伊万里、唐津にも負けないと土佐の尾戸、能茶山、鹿児焼きのおよそ80点が出展される。普段は人目に触れない個人所有の逸品だけに、愛好家には見逃せない展覧会になりそうだ。

●ずばり「戦争」がテーマ

7月18日～10月9日までは、―龍馬の望まなかった戦争―「戊辰戦争」展。スタンスは”風になった龍馬“の前触れ的企画である。「戦争」がポイントになる。

●弟、龍馬の手紙読む乙女（小林綾子）

イベントでは、龍馬生誕祭の前日、11月14日（土）県立美術館ホールで予定している朗読・コンサートに注目して欲しい。女優の小林綾子さん・シンセサイザー奏者、作曲家である西村直記さん、それに館の学芸主任、前田由紀枝が一組で、小林さんが乙女になって弟、龍馬からの手紙をアドリブをいれて読む趣向。背後に西村さんの演奏が流れ、時代背景解説は前田がというふうになる。龍馬を知るにはもってこいだと思っている。

ほかにも、第1回現代龍馬学会、子供たち対象の「龍馬紙芝居行脚」、バスツアーなどを企画している。

熱い討議で盛り上がる運営協議会 さらにレベルアップを！

20年度最後の坂本龍馬記念館運営協議会＝座長・片岡雅文氏＝は2月5日、館の会議室で協議会委員全員出席で開かれた。

事務局からの20年度の報告の後、来年に迫った大河ドラマ「龍馬伝」対策などを中心に話し合った。その中で、肝心の地元高知の龍馬認識度が県外に比べ低いことが指摘された。とにかく龍馬を知ってもらう、語ってもらうことの必要性が急務だと意見が一致した。そのことが、結果的に観光産業などに結びつくと結論付けた。館の入館者は先の「坂本直行」展以後、新しい龍馬記念館ファンも増えてきており、「龍馬伝」をきっかけに更なるレベルアップを申し合わせた。

森　健志郎

「近世土佐（江戸・幕末・明治）の焼き物」展

―個人所蔵の名品が一堂に―

4月1日（水）～7月17日（金）

【展示資料紹介】

興奮冷めやらぬ打ち合わせ風景

「尾戸焼」という焼き物をご存知でしょうか。承応二年（一六五三）、二代目土佐藩主山内忠義の意向により、大坂の陶工久野正伯を招いて高知城の北尾戸（現：小津町）に窯を創ったのが始まりと言われています。山内家への献上品、さらには将軍家や諸大名への贈答品として用いられていました。風格、品位は九谷、唐津にも劣らないと言われますが、世間ではあまり知られていません。地元高知でも同様です。そこで今春は、尾戸焼・能茶山焼を中心とした「近世土佐の焼き物」展を開催するはこびとなりました。「幕末土佐の刀剣と鍔」展でもお世話になった土佐歴史資料研究会（土佐武具研究会）の皆さんのご協力により実現します。

今回の企画展では、これまであまり人目に触れる機会のなかった個人所蔵の名品だけを一堂に集めて展示いたします。こんなに贅沢な展示は今までに見たことがないと、土佐歴史資料研究会の皆さんも息をのむほどです。

焼き物をお借りするにあたり、所蔵者の皆さんの熱い想いに触れました。時代の移り変わりの中で、いつしか土佐の人々の記憶から尾戸焼や能茶山焼は消えつつありました。「四百年もの昔から土佐に息づく焼き物を忘れてはならない」。そうした愛好家の皆さんが土佐の焼き物を収集・保存し、現在まで守り続けてこられたのです。「本来であれば、博物館が収集・保存し、後世にまで伝えていくべきものだが、それができていない。それなら自分たちの手で…」。皆さんの切なる想いが伝わってきました。

この企画展が、高知の方にとって地元文化を再認識するきかけとなり、また陶器を愛する方々には、龍馬にも関心を持っていただける機会にもなればと考えています。陶器と時代を重ね合わせると、その時代の社会、生活、土佐人の姿が浮かんでくるはずです。ぜひご期待ください。

尾崎　由紀

尾戸焼鰹形蓋物

色・形ともに本物と見間違うほどにリアルな鰹である。「蓋物（ふたもの）」とは蒸し物を入れて、温かい状態を保つための器。ひれの部分が持ち手になっており、身の部分が蓋になっている。

能茶山土佐駒図湯呑

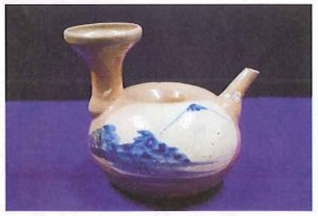
「土佐駒」は土佐特産の小馬。「まるで犬の如し」と言われるほど小柄であるが、持久力に優れ、険しい山道をいくら歩いても疲れることを知らず、また蹄（ひづめ）が堅く蹄鉄の必要もないという経済的な馬であった。農耕にも戦にも適していたが、明治に入り外国馬が輸入されるに従い、昭和初期には姿を消してしまった。

能茶山山水図植木鉢

尾戸焼・能茶山焼には銘がないものが多く、この植木鉢にも銘はない。「銘がない」＝「献上品」であったという証であり、品の良いものとされている。同じ図柄でもまったく出来が違う。

砧徳利・砧台と砧

「砧」とは布をたたいて繊維をほぐし、着やすくするための道具である。その砧に形がよく似ていることから砧徳利という名がついている。



尾戸焼いられ燗

「いられ」とは土佐弁で「せっかちな人」という意味。通常日本酒の熱燗は沸かしたお湯の中に徳利を入れて湯煎をして温めるが、この徳利は上から見るとドーナツ形をしており、すばやく熱が伝わるようになっている。さらに、湯煎ではなく炭をおこしたところに直接くべて温める。“いられ”な土佐人独特の文化である。このいられ燗でもお酒が沸くのを待てない人は冷やで飲むしかない。

尾戸焼南京形振出

かぽちゃの形をした茶道具の一種。「振出（ふりだし）」とは金平糖を入れる器。かぽちゃのヘタが蓋になっている。

京土産臆病湯文字入砧徳利

この徳利は和食村（現・芸西村和食）庄屋の千屋半平が持っていた物と伝わっている。

「京みやげ　臆病湯」と書かれた文字は、二五代土佐藩主山内容堂が京都から逃げ帰ってきたことを風刺したものだと伝わる。容堂は京都から逃げるように帰ってきたことが、実は三回もある。徳利がどの回のものかもはっきりしないが、おそらくは一回目の離京のことで、文久三年（一八六三）四月頃のことだと考えられている。

【容堂の離京】

文久三年一月、山内容堂など有力諸侯は、京都へ集まるよう幕府から命じられた。三月、徳川家茂が二三〇年ぶりの将軍上洛を行う準備のためである。入京前、容堂は一時大坂土佐藩邸に滞在した。そこで学者、池内大学と面会したが、直後に、その池内が土佐藩の下級藩士岡田以蔵に暗殺された。当時の容堂は、公武合体派・尊王攘夷派両方から期待され、動向は注目されていた。この暗殺は、尊攘派の裏切り者と目されていた池内を殺害することによって、公武合体、開国佐幕に傾く容堂を脅すことが目的だった。

その後容堂は、京都河原町の土佐藩邸でも脅しを受けている。公武合体派公卿の協力をしていた京都郊外唐橋村の里正（庄屋）、惣介が暗殺されたのだ。これも暗殺者は土佐藩の下級藩士ではないかと噂された。

時代は尊王攘夷最盛期で、長州藩や土佐藩の尊攘派が中心となって朝廷を動かし、幕府に攘夷の実行を求める。公武合体派は手が出せず、薩摩の島津久光は三月一四日に上京してわずか五日で帰国。それに合わせて春嶽と容堂も帰国した。このことは、明らかに武合体派の敗退を意味していた。

この徳利からは、これらの話を肴に酒を酌み交わした勤王党同志の姿が見て取れる。

しかし、これらの嫌がらせが容堂の怒りを買い、苛烈な土佐勤王党の弾圧に繋がっていくのである。

三浦　夏樹

龍馬の望まなかった戦争戊辰戦争展

龍馬の死生観に見る

会期：平成21年7月18日（土）～10月9日（金）

戊辰戦争前の土佐藩は、山内容堂を始め、戦争に反対していた人が多かった。龍馬も例外ではない。国内戦争を望んではいなかった。

しかし大政奉還直前の慶応三年九月末、世間では武力倒幕の熱が吹き荒れていた。その最中、龍馬はライフル銃千丁とともに、土佐に帰郷している。戦争嫌いのはずなのに。ライフルとは。まさか？戦争の準備をしていた？いや、違う。その千丁のライフルは戦をするためのものではなく、逆に戦をしないようにするためのライフルだったと思うのである。龍馬は考える。日本人同士が傷つく国内戦は無意味なことだ。幕府に自ら戦意をなくさせ戦をしないようにするにはどうすればいいか。戦っても無駄だとの思いを相手に抱かすには、相手と同等並に戦力は整えていると見せなければならぬ。つまりライフルはこけおどしの”小道具“。龍馬の中国故事にヒントをえた実践ではないだろうか。

また、龍馬は戦争や切腹など無意味な死を嫌った。龍馬の死生観は残っている百三十九通の手紙や他の史料の随所に表れている。典型的なものを少し紹介したい。

・「是より、もふつまらぬ戦ハをこすまい、つまらぬ事にて死（ぬ）まいと、たがいニかたくやくそく致し候」（池内蔵太との約束）

・「人と言ものハ短気してめつたニ死ぬものでなし。又人おころすものでなし」（乙女宛て）

・寺田屋で幕府方に襲われた時、三吉慎蔵は潔く切腹しようと提案するが、龍馬は反対し、三吉に「か八か伏見薩摩藩邸へ走ってほしいと頼む。（三吉慎蔵日記より）

このように、龍馬は常に生きる道を選択する人であった。

しかし、「天下のセ話ハ実ニおふざツパいなるものニて、命さへすてれバおもしろき事なり」と、日本のために命を捨てる覚悟は人一倍できていた。

このような龍馬の死生観に基づきこの企画展では、戊辰戦争の意義を考えたい。戊辰戦争は本当に必要な戦争だったのか？巻き込まれた東北の人々から見た戊辰戦争の意義も考えてみる。

三浦　夏樹

この写真は、前列右から二番目が板垣退助、中列右から二番目が谷干城で、土佐藩「東征軍」幹部の写真である。土佐から兵を率いて京都へ上った板垣は、東山道軍の別隊を指揮することになった。その後、土佐藩は薩摩藩と会津攻めを担当した。

動き出した現代龍馬学会

“自由・平等”の旗印掲げて

会長　永国　淳哉

発表者、テーマも決定

海援隊の帆船が、広い海原にくり出したように、現代龍馬学会も大きな夢をいっぱい描きながら静かに、力強く動きはじめた。

初日の発表者とテーマは、下の欄の通りとなっている。

二日目は、通常の学会形式と違い、これらの発表者が「夢」と「出会い」の2つの会場に分かれ、参加する会員と一緒に討議し、ひとつの「宣言文」にまとめてみようという試みである。

近代日本を築く礎の理念として、”自由と平等”の旗印を高く掲げながら、龍馬を語り合い、深く知りたいと思います。

発表者を簡単に紹介しておきます。

私（永国）の「龍馬の歌」は、龍馬の短歌などの調査から、その現代的な意義を発表。漢詩が見られない龍馬に目を向け、従来の”愚童説”に対し、土佐南学との関連の問題から、不登校問題まで話したいと意気込んでいます。

「横笛のことなど」を発表する渋谷雅之先生は、徳島大学の元副学長。薬学博士として幕末の写真から興味を持ち、今ではすっかり”龍馬研究家”となってしまいました。最近は、龍馬関係の帆船研究にも熱が入っています。

「夢分析」を話してしてくれる渡辺瑠海さんは、”龍馬”の著書も多いが、地元の高知ではTVキャスターとして知られ人気も高い方です。「龍馬の子孫」を報告する龍馬記念館の前田由紀枝学芸員と並び、二人の若い女性の発表者が出たことは嬉しいことです。発表とともに二日目の分科討論会が楽しみです。

「龍馬の歩いた道」の大洲市の村上恒夫氏は、”脱藩の道の開拓者”ともいわれる人物です。村上説が出るまでは”脱藩の道”観光ルートは全く違っていました。歴史的事実とは何かを、生き証人として体験して教えてくれるしょう。

京都国立博物館学芸課主任研究官の宮川禎一氏は「書簡にみる龍馬の心」として発表します。五年前に著書「龍馬を読む愉しさ」を発行して、龍馬の脱藩が坂本（権平）家の後継ぎと「人娘・春猪の養子問題と関連していた」可能性を「書簡」で示し、高知でも研究報告してくれました。

「ジョン万の夢」を発表する北代淳二氏は、数年前まではニューヨークに住み、私とは河田小龍著「漂巽紀略」を翻訳し、ジョン万の米国”古里”ニューベッドフォードで出版しました。また五月には日野原重明博士など一緒に、同地に向かい、日本中から頂戴した1億円以上の寄付で修復する”ジョン万ハウス”の式典に、運営委員として出席します。かつてのTBSのアンカーマンで、ワシントン支局長や世界中を取材してきた方です。

昨年、当学会を立ち上げる際、学会の趣意書として、現状を次のように訴えました。

「国民不在。政争に明け暮れる政治家たち。お金に主導権を握られたしまった経済界、不可解な事件が不安を募らせる一般社会。そんな殺伐、混迷の”平成世相”を「幕末」に例える声があります。『龍馬に日本の現状を見せて意見を聞きたい』『平成の龍馬よ、いずこに』。平成の龍馬を待ち望む声が巷に溢れています。」

こうした現代の理想のリーダーとして、司馬遼太郎先生は小説「竜馬がゆく」の主人公を描き、来年はNHK大河ドラマ「龍馬伝」で毎週ゴールデンタイムに魅力的な龍馬役が出演して活躍することになっています。

繰り返しますが、この学会は「単に歴史研究というのではなく、研究を通じて龍馬を現代にどう位置づけていけばいいかを広く考察したい」というあらゆる分野に開かれた会です。年令も関係ありません。

皆さん、学会に入り、”龍馬を語ろう”そして”龍馬を知ろう”

発表者のテーマ　4月18日（土）	
永国　淳哉	「龍馬研究‥龍馬の歌」
渋谷　雅之	「横笛のことなど―北海交易の夢―」
渡辺　瑠海	「夢分析に見る“幕末”」
前田　由紀枝	「家族の肖像―龍馬の子孫たち―」
村上　恒夫	「龍馬の歩いた道」
宮川　禎一	「書簡にみる龍馬の心」
北代　淳二	「ジョン万の夢・龍馬の夢」
4月19日（日）	A会場テーマ　「夢」 B会場テーマ　「出あい」

「海援隊約規物語」展終わる

龍馬精神の真髄ともいえる龍馬の”海援隊約規”をめぐる物語は、半年間という長丁場を無事終えることができました。

遡ること二年半前。ご記憶の方も多いと思いますが、『反骨の農民画家・坂本直行』展を開催しました。貧しく過酷な開拓農民として三十年を過ごし、「我が生涯に悔いなし」と言い切った農民画家・坂本直行を取り上げたものです。龍馬の子孫が北海道にいたという驚きとともに、語らずとも龍馬精神を彷彿とさせる子孫の生き様は多くの感動を呼びました。

北海道開拓に懸けた龍馬の思いは、跡を受け継いだ子孫たちによって叶えられました。その傍らにあったのが「海援隊約規」です。一族の思いは約規とともにあったといっても過言ではありません。

時代は巡り、二年前に高知の親族・弘松家に渡っていた約規を当館にご寄託いただいたときから「海援隊約規物語」の構想はありました。前期では、明治三十一年春に撮られた坂本一族の集合写真を手がかりに”龍馬その後”の一族の誇り、後期では約規にある海援隊魂を考察しました。端的に明快に謳いあげた約規の意義にどこまで迫れたのか。まだまだ調査研究は緒に就いたばかり。今後も地道に続けていくつもりです。

今回初めて北海道から里帰りした坂本家や浦臼町をはじめとする貴重な資料展示をすることができましたこと、関係の皆様に敬意とともに心より感謝申しあげます。

また、桂浜の龍馬像原型（木像）も八十年ぶりの里帰り。ご所蔵の本山家のご好意により、今年度も延長展示していくこととなりました。

最後に好評をいただいた海援隊約規の意訳を紹介して、「海援隊約規物語」展の報告とさせていただきます。

海援隊約規

一、入隊せんとする者は脱藩し海外をめざす者であること

入隊は自らの意志によって決めよ

一、すべての権限は隊長にある

隊士の生死をも預かる

一、道理をわきまえよ

最も慎むべきは独断　過激　妨害‥‥

一、学問を修めよ

意志をもって励み怠ってはならない

一、自分たちで稼ぎ利益は分配すること

不足の時は隊長自ら土佐商会主任に申し出る

以上五則

前田　由紀枝

ホームページリニューアル

4月、記念館ホームページがリニューアルします。

昨年7月、専門家と館職員で構成された「高知県立坂本龍馬記念館Webサイトリニューアルプロジェクト」を発足してから約10カ月、打ち合わせと編集作業を重ねてきましたが、遂にその日を迎える事になりました。

私はこのプロジェクトに参加出来て良かったと思います。初めての事だらけで大変でしたが、色んな事を学ぶ事が出来ました。今まで特に目的・目標を設定する事もなく、日々の情報を提供する事に追われていましたが、チームとして活動する事で、打ち合わせの仕方、スケジュール管理、コンテンツの企画書作成、写真撮影に画像編集…。協力して何かを作り上げる喜びを感じる事が出来ました。

今回リニューアルされたホームページには、新たなコンテンツも追加されます。その一部として『今日の龍馬、明日の龍馬』、『龍馬ゆかりの場所』、『龍馬の生涯』では、より多くの龍馬情報を提供します。『その言葉「幕末からの伝言」』では、幕末の志士が残した名言から、現代に生きる私達へのメッセージを配信します。

今後も皆様からのご意見ご感想をもとに、常に進化し続けられるように頑張っていきたいと思っております。ぜひリニューアルされたホームページご覧になってみてください。

渡辺　曜子

●高知県立坂本龍馬記念館
URL　http://www.ryoma-kinenkan.jp/

拝啓 龍馬殿

12月21日～3月20日

82通

誰よりも果敢な人で、誰よりも急いで生きてきた人。貴方の存在を無くしては今の日本を語れません。「おーい龍馬！あなたは真の日本一格好いい男です。」
（12月26日　愛知　T・N　32歳　女性）

今日は友人と一緒に見学に来ました。雄大な太平洋ともども、あなたの気概と志を見習いたいと願っています。
（12月27日　高知　N・N　37歳　男性）

初めて桂浜を訪れ、この広がる海を見て貴方の生きた時代の時間を痛い程感じました。夢、希望、とても大切な命のようなものです。今の日本、世界を龍馬さんはどのような言葉で手紙に書くのでしょうか。
（1月1日　宮城　Y・T　63歳　女性）

年明早々に竜馬さんに会いに来ました。三国志を思わす日本の現状、民を救うのは誰か、今こそ竜馬の理想を実現する時。先ず自ら一人立つこと。私は今年一年を青年・勝利の年と決め、青年の心で頑張ることを誓います。
（1月7日　高知　M・M　67歳　男性）

子供（息子：中3、娘：小2）を連れてやって来ました。太平洋を見て何を思ったのでしょうか。龍馬の大きな広い心に少しだけでも近づければと思います。母として何をしてやれるのか、いろいろ考え悩んでいたけど少しふっ切れました。
（1月11日　香川　H・K　42歳　女性）

高知に来たのは今回で2回目です。私も32才ですが、到底、龍馬殿の足元にも及ばない自分が小さく見えます。当時では考えられない発想や考え方や行動は、今でも見習う点が多々あります。この桂浜に来ることで、改めてこのままではいけない！何かやってやるぞと思い直させてくれます。今日この場に立ち戻り、また再スタートしていきたいと思います。見ていてくださいね！またここに来るときには、ちょっと自慢話でもできるようになっていたいと思います。
（2月1日　大阪　S・S　32歳　男性）

現在のだんなさんと付き合い始めの頃「オレと付き合うならまずこれを読まんば！」（偉そう…）と言われ、読まされたのが龍馬のマンガ本でした。初めはあまり興味がなかったけど、読んでいくうちに本当におもしろくて、龍馬の魅力にはまってしまいました。旅行はほとんど龍馬巡り。新婚旅行まで"龍馬巡り"（京都）でした。今回は前からずっと行きたかった龍馬の生まれた高知に来れて本当に大満足。今度は今お腹にいる子供を連れて来たいと思います（6月出産予定）。子供も龍馬にはまってくれるといいなぁ…。
（2月5日　福岡　S・K　28歳　女性）

50年ほど主人の転勤に伴い高知を離れていましたが、昭和20年まで二丁目に住まわせていただいて成長し、龍馬さんの生誕の地はすぐ近くで、いつも身近な方でありました。今は望郷の思ひ切なるものがあり、年二度程主人の墓参りに行くのを仕事のようにして暮らしてをります。今日は初めてこの記念館に伺ひました。85歳にもなって曲りなりにも一人旅の出来ますことを心から感謝しながら、子供の行末を見守って、日本のこれからを見失わないようにやっていってもらいたいと心から願ってをります。ゆっくり拝見させていただきます。
（2月10日　埼玉　H・H　85歳　女性）

さかもとりょうまさん、ぼくはなんかでまけたらすぐないてしまいます。どうしたらいいでしょうか。りょうまさんのように強くなりたいです。気もちを強くします。
（2月11日　高知　K・Y　8歳　男子）

東京からやってきました。司馬遼太郎で読んだ『竜馬がゆく』の思い出がよみがえってきて幸せな気持ちになりました。返り血のついた屏風がとても悲しい気持ちになりました。僕は『竜馬がゆく』の八巻（暗殺されちゃう巻）だけどうしても読めないままなので、僕の中では竜馬は死んでません。あの屏風が二セものだということを願ってます。とりあえず、一生八巻読みません。また来ます。
（2月12日　東京　M・S　23歳　男性）

初めて龍馬記念館へ訪れました。昔から龍馬にとても憧れてきて、あなたが生きた年以上の年齢を重ねてきましたが、改めてあなたの目指したもの、残したもの、そして"志"に感服いたします。平成という今の時代は、ある程度は自分の目指す道や生き方など、自由に選択でき、当時に比べるとはるかに豊かな生き方ができるはずです。しかし、思うようにいっていない。満ち足りていすぎる現実の中で、ぬるま湯につかっているのでしょうね。でも、私たちの先人にあなたのような人がいる。そう思えるだけでも、今を生きる糧になっています。まぁ見ていてください。微力な自分ですが、やりますよ。
（2月14日　広島　M・A　41歳　男性）

生きることがつらくなったり、くじけそうになったりすることが、たびたびあります。そんな時いつも龍馬を思います。今生かされていることへの感謝を、何か自分には成すべきことが残されているのだといつも考えています。それが何なのか、まだはっきりと見えてはきませんが、2人のとても良い子を育て、一人前になりつつある姿を見るたびに、いよいよこれから私の人生を歩く時がきたのだとつくづく思います。龍馬の生き方が私の支えです。見ていてください。
（2月25日　徳島　T・H　50歳　女性）

28歳になる今、15年間思いをはせていた桂浜に来ました。当時中学生の私は今よりも龍馬様へのあこがれや尊敬が強かったと思います。今会社員として組織の中、決められたルールや毎日同じ事の繰り返しを考えると自分が非常にちっぽけな気がします。将来、自分の進むべき道がまた見えてきて、中学生のときのような情熱を持ってまたここに来ます。
（2月16日　東京　M・O　28歳　女性）

今年の4月から社会人になる私にとって、この記念館は学生生活の中で一度は訪れなければ!!と考えていた場所です。あなた様の決断力や行動力を私はまだ持っていません。何年後、再び、この場所に来た時には、あなたにどのくらい近づいているのかを楽しみにして頑張って働こうと思います。
（2月18日　奈良　S・K　22歳　男性）

＊＊＊ 編集者より ＊＊＊

年末・年始の開館も3年目となり、たくさんの方にご来館いただきました。また、この時期は4月より新たに社会へ出る方たちが、龍馬に会いにやってきます。皆さん、年頭や新たな門出にあたり、強い決意を胸にこの地にやってきて、桂浜の龍馬像に誓いをたてているようです。きっとまた何年後かにこの地へやってきて龍馬に報告をするのでしょう。ほいたら待ちゆうき。

装道礼法を学ぶ方たちが日本人の心、作法の妙味を実演した＝今年1月の近江屋対談

近江屋対談

一昨年十一月から始まった近江屋対談は、月一回の開催を重ねてきました。龍馬談義にはじまり時のテーマまで話の種は尽きません。多士済々のゲスト登場と、近江屋ならではのアットホームな雰囲気にリピーターも増えています。

今までは毎月の開催をしてきましたが、今後は不定期、タイムリーに行っていきます。これからもご期待ください。

前田　由紀枝

◇今までの開催（敬称略）

①二〇〇七年十一月「私と龍馬と直行と」坂本家九代当主・坂本登×森館長②十二月「古写真で探る幕末の秘密」徳島大学名誉教授・渋谷雅之×前田③二〇〇八年一月「熱く熱く熱く"龍馬"を語る」坊っちゃん劇場支配人・山川龍巳×俳優・泉堅太郎×森館長④二月「古写真は語る」徳島大学名誉教授・渋谷雅之×前田⑤三月「子孫が語る龍馬のルーツ」歴史研究家・土居晴夫×前田⑥四月「春、お遍路さんが行く・霊場の魅力」金剛頂寺住職・坂井知宏×シンセサイザー奏者・西村直記×森館長⑦五月「桂浜と龍馬」歴史研究家・永国淳哉×龍馬研究会会長・岩崎義郎×三浦⑧六月「はちきんの訪（たん）ねて候・龍馬編」エッセイスト・渡辺瑠海×前田⑨七月「何を"せんたく"するのか？」前高知県知事・橋本大二郎×前田⑩八月「日本刀の魅力」刀剣研究家・小美濃清明×三浦⑪九月「龍馬の魅力ウソ・ホント」兵庫龍馬会会長・楠本剛×三浦⑫十月「人生、龍馬スピリッツで」ギタリスト・松尾貴臣×森館長⑬十一月「龍馬が"リョウマ"になった理由（わけ）」県立歴史民俗資料館館長・宅間一之×カルチャーサポーター・今久保約雄×前田⑭十二月「記者が見たモネの浮世絵」高知新聞学芸部記者・松井久美×前田⑮二〇〇九年一月「伝統文化をこどもに」装道礼法代表・神木知香×装道礼法きもの学院県支部長・徳能美代×前田⑯二月「龍馬の花と歌」歴史研究家・永国淳哉×前田

ここは館長の部屋　森　健志郎

別れの季節に

就任したのは真夏だったから、坂本龍馬記念館でお世話になって今年は4回目の桜の季節である。この時期の桂浜は、春霞、黄砂飛来、太陽が雲の中に白く輝いている。数年前、黄砂の源中国の砂漠地帯で見た太陽を思い起こさせる。そんな日に館の南端ガラス張りの"空白のステージ"に立つと、水平線は気のせいか弱々しげに見える。出勤時、県道から左にそれて館に登ってくる200メートルほどの坂道カーブに、気の早い真っ赤な花びらの椿の花が三つ、四つ転がっていて、思わずブレーキを踏んでいたり。

それやこれやで、春三月は妙にやるせない日々が続く。

今年はその気持ちがさらに増幅した。「別れ」が重なったのだ。しかも3人も一度に。館長以下13人の小所帯の中の3人である。こたえた。副館長さんは任期満了。ただ後の2人の女性はそうではない。自分で仕事にケリをつけた。それぞれの思いがあってのことであろう。ただわが身に置き換える時、理由は別にしてなぜか切なさがこみ上げてくる。

まして、2人は館の生え抜き。経験に裏打ちされた存在感は誰にも真似出来るものではない。わが心にけじめをつけるのにしばらく時間がかかった。

桜前線が近づいた。例年よりかなり早い予想を聞いた。

その花びらが散る頃がお別れである。忘れないだろう春である。忘れられない春になると思う。

森　健志郎

退職する市川さん（右）・弘田さん（左）

■第2弾「吉松八重樹 挿絵原画」展（2008年12月26日～2009年2月15日）

高知市浦戸出身、気骨の挿絵画家吉松八重樹さん＝埼玉県富士見市の挿絵原画展を“海の見える・ぎゃらりい”で開催しました。第1弾は昨年10月に「吉松八重樹　故郷との出会い」展、メインは油彩そして挿絵は150点ほどの展示でした。それでも展示しきれない作品がたくさんあり、「ほかの作品も見てみたい」というお声もいただき、第2弾として挿絵の原画約300点を、期間延長で展示しました。

国内、海外、時代を問わず、あらゆるジャンルのものが自由自在に描き込まれた吉松さんの世界。絵筆一本で表現された原画の一つ一つから、吉松さんご自身の深い思いと人生そのものが鼓動の様に伝わってくる作品で溢れていました。また会場には、「八重樹語録」として前回30年ぶりに帰郷された時にお伺いしたエピソードの数々も展示させていただきました。

作品との出合い、そして人との出会いとはまさに今回のようなことを言うのだと心から実感した展覧会となりました。

中村　昌代

▶津本陽作『千葉周作　蟻地獄』より

▶童画幼年雑誌『幼稚園』より『いっすんぼうし』

■ 歴史探訪バスツアー『龍馬・心のふるさとを訪ねて』（2009年2月8日）

土佐での龍馬に大きな影響を与えた一人に安田の郷士・高松順蔵がいます。龍馬の長姉・千鶴の夫で28歳年長の義兄。龍馬は高知城下から50km以上離れた安田町の高松家によく行っていたと言われています。

そんな安田町を中心とした歴史探訪を開催。県東部での龍馬の足跡、龍馬がふるさとのように通った場所を巡りました。芸東の海を眺め、芸西村、田野町、北川村など各所を見学、忙しくも充実した一日でした。

▲大勢の参加者が熱心に県東部の史跡を回った＝安田町の高松順蔵・千鶴の墓所で

50人を超す参加者はじめ、解説にご協力をいただいた諸氏に感謝申しあげます。

前田　由紀枝

■龍馬検定合格者第1号

昨年8月11日、龍馬検定の中級編がスタートしました。中級編からは、当館内の検定専用掲示板に合格者のお名前を掲示させていただいています。その最初の合格者が、竹内雄司さんです。インターネット検定なので、少し難しい問題を作ったつもりでしたが、初日に易々と合格されました。

先日、竹内さんがご来館くださりお話しを伺ったところ、龍馬に興味を持ったきっかけは、マンガの『おーい!竜馬』だったそうです。当館へはここ数年、企画展ごとに来館してくださっており、1年に5～6回にもなるそうです。三重県にお住まいなので、車で約6時間かかり、長い時には4泊して、高知の史跡などを巡られるそうです。

お話しを聞いて納得です。これなら中級編なんて軽く突破されるはずです。上級編は、4月から再び2ヶ月間開催されますので、ぜひ挑戦していただきたいと思います。

▲検定合格者掲示板の前での竹内さん

入館状況

2009年3月20日現在（開館以来6,291日）

◆総入館者数		2,249,406人
◆2008年度最多入館	5月 4日	2,321人
2008年度最少入館	2月 3日	63人
2008年度1日平均入館者数		367人
◇最多入館	1993.5.3	3,700人
◇最少入館	2004.10.20（台風のため）	8人

編集後記

69号は、外部の寄稿原稿がなかった。それだけ、館内独自の動きが激しかったと言うことになろうか。つまりそれは職員の皆さんの負担増に違いない。確かに仕事内容の密度が濃くなっている。かけもち対応。飛騰の原稿を閉館後に書いている。その努力が実って、締め切り前に全原稿がそろった。外はもう暗い。コピー機がまだうなっている。（モ）

館だより“飛　騰”第69号（年4回発行）　表紙題字：書家 沢田 明子 氏

発行日　2009（平成21）年4月1日
発　行　高知県立坂本龍馬記念館
〒781-0262 高知市浦戸城山830
TEL（088）841-0001　FAX（088）841-0015
http://ryoma-kinenkan.jp
「飛騰」に対するご意見ご感想などお寄せください

開館時間　9:00～17:00　年中無休
入館料　一般500円・高校生以下無料
（特別企画展料金のため）

館だより「飛騰」は、郵送料のみのご負担でお届けいたします。ご希望の方は、90円切手5枚をお送りください